【農林水産研究指導センター　研究Now】vol. 97	令和2年2月28日発表

とてもお手軽！潮間帯で地ガキの天然採苗！

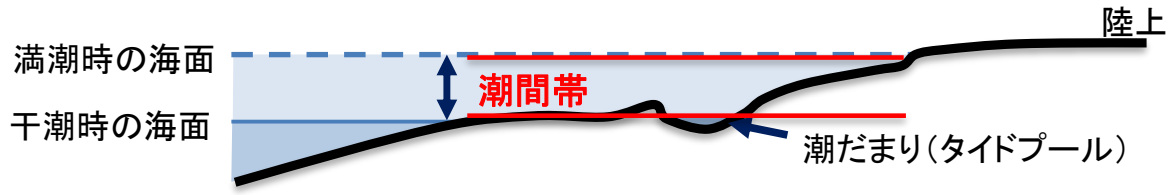
【研究のポイント】

　県内のマガキ養殖については、杵築市が主産地ですが、近年、中津市の「ひがた美人」や国東市の「くにさきOYSTER」、佐伯市の「アイランドオイスター」といった新規のカキ生産も始まっています。

　こうした中、種苗の安定確保や多様化などの課題に対応するため、当グループでは、平成30年度から「イノベーション創出強化研究推進事業」に参画し、国の研究機関等において開発された潮間帯でのマガキ天然採苗技術を県内海域において現地実証しています。

《潮間帯って？》

　潮の干満により海面は上下しますが、満潮時の海岸線と干潮時の海岸線との間の部分を潮間帯と呼びます。



《なぜ潮間帯で採苗するの？》

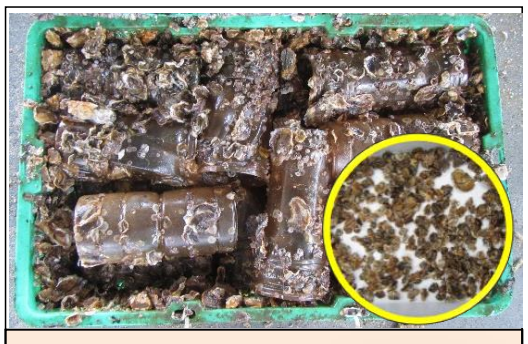
　カキの産卵シーズンが始まる6～7月に採苗器を潮間帯に設置し、稚貝の付着を待ちます。潮間帯は干潮時には直接空気にさらされるため、乾燥や紫外線に対する耐性の強い、カキのような限られた一部の水産生物しか生息出来ません。このため、海中に浸かりっぱなしの状態と比べて採苗器の汚れ（他の生物の付着等）が少なく、より長い期間の採苗が可能となります。

【研究の成果】

①3種類の付着基質を使って稚貝を採苗してみました。

「ケアシェル」
カキ殻粉末を成形加工した固形物

「クペル」
合成樹脂で加工された軟質素材

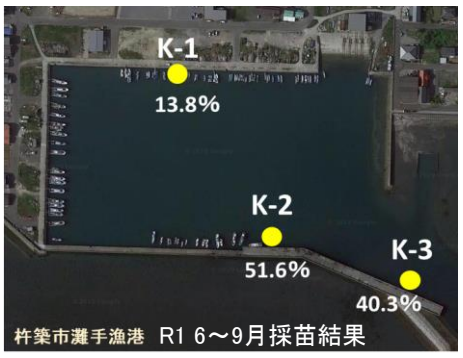


「ペットボトル」

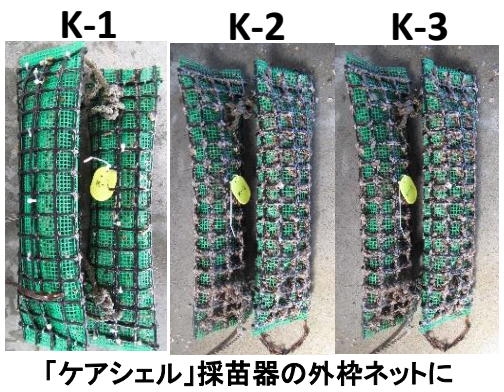
①

3種類の付着基質ともに比較的良好な稚貝の付着がみられました。

②杵築市灘手漁港内の稚貝の付着状況を調べてみました。



採苗器内に収容したケアシェルのうち、稚貝が付着したケアシェルの割合（%）



「ケアシェル」採苗器の外枠ネットに付着した稚貝の成長

「ケアシェル」採苗器に付着したマガキ稚貝の地点別付着状況

②

より多くの大きな稚貝を採苗するには、港奥部より港口部の海水交換の良い地点が適していることが明らかになりました。

潮間帯でのマガキ天然採苗技術は本県においても有用なことを確認!!

【生産者の声】

大分県漁業協同組合
杵築支店長 奥井豊広 氏

　県漁協杵築支店の奥井です。ここ杵築のカキ養殖には、主に宮城県産の天然種苗が用いられていますが、天然採苗は自然任せなところがあるため、年によっては稚貝の付着が少ない、出来の悪い種苗しか手に入らないこともあります。そこで、自前でも種苗を確保しようと、数年前から守江湾にある養殖漁場内で天然採苗の取組を試験的に行っています。地場天然採苗については組合員の関心も高いことから、本研究成果の速やかな普及を期待しています。

【連絡先】

担　当：農林水産研究指導センター水産研究部　北部水産グループ　資源増殖チーム
ＴＥＬ：０９７８－２２－２４０５
住　所：豊後高田市呉崎３３８６番地